



教皇様の敵

Libreria Editrice Vaticana,
Città del Vaticanoの転載許可済
©1989
発行所
財団法人 精道教育促進協会
〒659 兵庫県芦屋市船戸町12-6
☎(0797)31-3452

マリリアの助けで聖霊に聴く

1 (…この世に聖霊が来られた事と、マリリアが私たちの間に現存しておられる事とは、密接な関係にあります。聖霊は私たちにマリリアを与え、マリリアは私たちに聖霊へと導くのです。

聖霊と聖母とは、教会の始まりにおられます。

マリリアは教会に、その創立者である主イエズス・キリストをくださいました。聖霊は教会に、生命と地の果てまで育ち広がる力をくださいます。

教会の誕生以来、聖霊とマリリアとは教会に現存し、歴史を通して主の弟子たちと共に、主が栄光を帯びて戻って来られるよう、祈り求めています。

2 私は回勅『ドミニム・エト・ヴィヴィファイカントム』の中で次のように申しました。「霊的にみれば、ペンテコステの出来事は過去のものではありません。教会は心の中にある高間に常にいるのです。」

キリストの御母マリリアと共にいた使徒たちのように、教会は祈りに忍耐するのです。(66番)

マリリアの祈りと一致して、聖霊の内に教会は永遠のペンテコステを生かすことができます。教会は、聖霊とマリリアとの祈りに加わって、幾世紀にも渡って、主イエズスが託された使命に忠実であり続ける力を見出し、また悪の力を決定的に征服するために常に新しいメンバーを育て、愛徳と聖性の新しい始まりを常に実現させるための力を見出しています。

私たちが聖化の旅を続けていること、またキリストと教会との交わりを保っていることの秘密は、ひとえにパウロの言う霊の「筆舌に尽くしがたい嘆き」(ローマ8・26)に一致することができるという事実、すなわち救いについての神の御旨と計画を余すところなくご存じの唯一の御方、聖霊のこの不思議な(取次ぎ)に一致することができるとはならないので、この計画を成し遂げるために、

3 マリリアはマリリアで聖霊の生命を与える爽り豊かな息吹に向けて私たちが心を開き、その声を識別するよう助けてくださいます。聖霊が御自ら、あるいは教会を通して私たちに仰せになることを謙遜と信頼の心で聞き入れ、私たち自身のものにするようお助けになるのです。

マリリアは真理がどこからであれ、どんな風であれ、私たちのもとへ来るその経路の全てを開けておくようにと教えてくださいます。「真実なものは何であれ、誰の口から出るにしろ全て聖霊から来る」とトマス・アキナスは言っています。(聖ヨハネ福音書註解1・46, Lect. II, No.103)

ペンテコステの息吹は真理の息吹であって、世界を征服し、人々の良心を勝ち取るのです。マリリアはこの出来事、この救いの旅の中心にいます。私たちが常に聖霊の声に應える用意ができていますよう、もう一度マリリアに祈りましょう。(八九・五・二二)

「霊の意向」を私たち自身のものになくしてはなりません。そうすることによってのみ、キリストの御名によって祈り、御父の慈しみを受けることができるのです。

聖霊の賜についての考察は、もう一つの大切な賜物である孝愛に移ります。この賜の御蔭で頑な心が癒され、神と兄弟姉妹に対する優しい心を保つことができるようになります。

神に対する子としての優しさは、祈りに表れます。自らの存在の乏しさや現世的なものが霊魂に残す空虚さを経験すると、恩寵と助けと救しを得るため神に向かう必要を感じます。孝愛の賜はこのように必要を感ずる神に導き育み、優しく寛大な父なる神に対する深い信頼心を与えてくれます。聖パウロはこの意味で次のように書いています。

「神は御子を遣わされた。それは律法の下にある者を贖い、私たちが養子にするためであった。あなたたちが神の子である証拠は、『アッバ、父よ』と叫ぶ御子の霊を神が私たちの心に遣わされたことである。だから、もはやあなたは奴隷ではなく子である。(ガラタイア4・4-7, ローマ8・15参照)

孝愛の賜

—新たな人間社会の根本—

兄弟に対するほんとうの寛大さ、優しさは隣人に対する柔和な心に表れます。聖霊は、孝愛の賜と共に兄弟同胞を愛する能力を注入して下さり、その結果、何らかの仕方でキリストの聖心の優しさそのものに与ることができるようになります。(敬虔)な信者、すなわち孝愛の賜を持つ信者なら、人々とは教会を構成する神の家族であり、同じ父の子となるよう召されているものと考えます。そういう人なら、率直で兄弟的な関係に固有な優しさと好意をもって、人々に接するよう励まされるでしょう。

孝愛の賜はさらに、心の中の反感と怒りと苛立ちのもと、すなわち緊張と分裂の火を消し去り、理解と寛容と救しの心を育んでくれます。したがって、このような賜は、愛の文明を基盤にした新たな人間社会の根本となるものです。

熱心な祈りと母親らしい優しさの模範であるマリリアの取り次ぎに私たちの祈りを委ね、この賜を新たに注いでくださるよう、聖霊にお願いしましょう。教会が、聖母の連禱で(信心のすぐれたる器)と挨拶する御方に、私たちが「霊と真理をもって」(ヨハネ4・23)神を礼拝し、教会の子供である人々(したがって私たちの兄弟姉妹)に対して柔和で広い心を開くことのできるよう、お願いしましょう。(サルヴェ・レジーナ)(元后あわれみ深き御母)の言葉を借りて、寛容、仁慈、甘美にまします童貞(処女)マリリアと、聖母に語りかけ、祈りを委ねましょう。(八九・五・二八)

◆ 聖なるロザリオを祝う今月十月、教会はロザリオの元

后への愛を増すように勧めます。この敬虔な祈りにしばらく心を留めましょう。ロザリオは、キリストを信じる人々の心に深く根をおろした祈りです。そして、私たちの先輩たちが心から

勧めた祈りです。彼らは、その神学的・霊的な特性を示しつつ、賛美と祈願の祈りとして大切に、広めてきました。教皇レオ十三世は、回教『オクトブリス・メンセ』のなかで次のように語っています。「信者の皆さんがこの尊い秘義を正しく黙想し、熟考するならば、自らの信仰を増し、靈魂の活力を高め、強めるのに、素晴らしい助けを得るでしょう。」

ロザリオを唱えることは、マリアの学校に入ること。そしてキリストを信じる者(マリアは最初に信じた方でした)、教会の一員(マリアは、高間にいた御子の最初の弟子たちの一致と愛の中心でした)として求められていることに、どのようにすれば深く、十分に答えられるかを、キリストの御母であり弟子であるマリアから学ぶことです。

ロザリオは聖母との親しい語り合い

◆ 聖なるロザリオを唱えること、それは、ただきまつた文句を繰り返すことではありません。マリアと心をこめた会話を交わすこと、マリアに話しかけることです。願いを聞いていただき、悲しみを打ち明け、心を開き、いつ

でも神の御旨を受け入れる用意ができていることを話し、いかなる状況においても、どのような困難、悲しみにあっても、マリアの御保護に身をゆだね、マリアを通して御子から救いの賜をいただくことを確信し、マリアへの忠誠を持ち続ける、と約束することなのです。

ロザリオを唱え、無原罪のマリア・御母のうちにキリストを黙想します。主の御生涯、御受難、御復活を、御子の最も近くにおられたマリアの目と心を通して黙想するのです。教会の交わり、家族の親しみのなかで、熱心にロザリオを唱えましょう。繰り返す祈りのあとで、心は結ばれ、火は再び燃え上り、希望は強まり、私たちのために生まれ、死に、蘇られたキリストの平和と喜びが与えられます。(八八・十・二)

最近中国で起った出来事についてのニュースや映像、中でも多くの青年の死に大きな衝撃を受けました。この悲劇的な事件を知った当初から、私の悲しみと危惧の念を表明すると共に、福音の教えに照らして、今回の悲しみが偉大で愛すべき国の新たな生きかたに役立つよう願ってきました。

上海の近くのシェシヤンで敬われている平和の元后・中国の母マリアに捧げる私の祈りに、皆さんが同じ信仰と希望をもって加わってくださいようお願いします。シェシヤンの聖母マリア、キリスト信者の希望よ、中国の愛すべき人々に御身の優しい眼差しを注いでく

ださい。

御身の子である私たちは再び御前に出て、心の底から私たちの愛と悲しみと同情についてお話ししたいと



思います。このように悲しくも悲劇的な時にあたり、暴力の犠牲者の苦しみと正義に飢え正義を求める人たちの嘆願、自国の善を望む人々の希望を御心に委ねます。

この偉大な国の行く末を定める人々のために、どうか光を取り次いでください。彼らが真理と正義と自由の尊重を基礎とする共通善を求めるにあたり、必要な知恵を常に持つことができるとは幸いです。私たちは寛容、仁慈、甘美にまします聖母マリアに偉大な中国の青年たちを特に委ねたいと思います。アーメン。(八九・六・一八)

良き牧者



1 「私は良い牧者で自分の羊を知り、私の羊もまた私を知っている。(ヨハネ10・14)(…)

良き牧者の真理は超越と深い関係をもっています。キリストの言葉によれば、良き牧者とはどんな方でしょうか？ それは「羊のために自分の命を捨てる」(ヨハネ10・11)方のことです。これはまさに超越の秘義です。

今日は典礼の言葉を通して、全教会が良き牧者キリストを見つめます。キリストがたとえて示されたこと、十字架の犠牲と復活によって確証さ

れたことは、教会を通して、教会のうちに、今も現存する事実であると教会は信じています。

良き牧者の息吹が神の民全てに満ち、一人ひとりに、共同体にいき渡り、特に司祭職と修道者の召出し、すなわち教会と世界における牧者としての奉仕という形に表れるよう祈りたいと思います。

2 今日 聖母マリアの御母としての御方なものですから。(ヨハネ10・28参照) 自由意志による完全な自己奉獻を通して、キリストは御父の愛を示されました。それによって、キリスト

ズスは言っておられます。「私の羊はこの声を聞き分け、私に従い、私も彼らを知っている。私は彼らに永遠の命を与える。彼らは永遠に滅びず、そして私の手から誰も彼らを奪えない。父が私にくださったものは何もにもまさって尊いもので、それを私の父の手から奪える者はいない。私と父は一つである。(ヨハネ10・27-30)

キリストは良い賢明な牧者で、私たちはその言葉に耳を傾け、その旋に従い、信仰と愛を持ってその後について歩む羊です。牧者は群れの世話をし、羊のために自らの命を捨てます。御父がお与えになったものを心から世話する御方なものですから。(ヨハネ10・28参照) 自由意志による完全な自己奉獻を通して、キリストは御父の愛を示されました。それによって、キリスト

説教・講話・書簡等の抄記

に從う人々は永遠の命を受け、誰もキリストから離れることはなくなりました。「私は彼らに永遠の命を与える。彼らは永遠に滅びない。(同) 慰めとなるこの言葉はキリストによるものです。今もそしてこれからも永遠に生命の源となるために、犠牲のうちに御自分を人々にお与えになったのです。これはある意味で、御父が御自身を御子にお与えになることで、御子と一つとなられたことと同じであると言えましょう。(ヨハネ6・57、10・29参照)

3 次に、教会論の観点から考えてみましょう。良き牧者キリストは、今日も教会を通して世界に現存されます。このことは使徒行録の一節にみることが出来ます。ピシディアのアンテオキアでのパウロとバルナバの働きのことです。二人は、御独子を犠牲にするまで私たちがを愛し、全ての人をキリストと一体となるよう呼んでくださる神の良き便りを伝えたのでした。

全ての人を贖うという御旨は、異邦人の使徒とその使命を共にする仲間によってためらうことなく公に宣言されました。(使徒行録13・16参照) ねたみかられたユダヤ人たちは、異邦人に救いを説くことを妨げようと反論しましたが、二人は主が預言者イザヤを通して命じられたこと、「私はお前を国々の光とし、地の果てまで救いをもっていかせよう」(イザヤ49・6、使徒行録13・47参照)を思い出させ、反論を退けました。救い主の愛は彼らの心に満ち、どのような困難も宣教の妨げとはならなかったのです。むしろ、十字架に



つけられたキリストとの一致が復活の契りをもたらすことに気づいていたので、困難に直面しても耐えることができたのです。

皆さん、使徒たちが救いの真理を宣言した時の真剣で断固とした意志をただ称賛するだけにとどまらず、全ての人の真理の光である復活された御父が慈しみと愛の奇跡を通して、人類の切望に対して示してください。た答えの確かな証人となるよう努めましょう。キリストの知と愛において成長し、キリストの教会の発展に貢献できるように、キリストの使命を私たちの職務にしましょう。

4 最後に、良き牧者の真理をヨハネの黙示録を通して終末論の観点から再考しましょう。

そこでは、「羊」はすべての国と民族と言葉の、おびただしい数えきれぬ大群衆...(黙示録7・9)と表現されています。

キリストのうちに洗礼をうけた人は「大きな患難を抜けた人々である。小羊の血で自分たちの服を洗って白くした」(黙示録7・14)と記されているように、羊のために自らの命を捨てた良き牧者の犠牲が実を結んだのです。

贖い主によって救われた人々は「玉座の前と小羊の前に立ち(黙示録7・9)、「選ばれた民族、王の司祭職」(ペトロ①2・9参照)として、賛美と礼拝と崇敬のいけにえで天国の永遠の典礼を祝います。

彼らは幸福に包まれ、手にするしゅるの枝(勝利)が示すように彼ら

摂理と人間の自由

1 摂理シリーズ ④

1 神の摂理の秘義を究めていくと、しばしば次のような疑問に襲われます。もし神が存在し、森羅万象を司どっているのなら、人間は自由であると言えるだろうか。そもそも人間の自由とは何だろうか。どんな使命が託されているのか。自由の濫用から生じた罪という悪の果実を、摂理の光の下ではどのように理解すればよいのか。

もう一度、第一バティカン公会議の厳肅な宣言を聞いてみましょう。「神はお創りになったすべてのものを、摂理によって保ち、治める。この世の果てから果てまで、その力を

の喜びは「神の玉座の前」で永遠に続き、神は彼らを愛し、永遠にその「聖所」に迎え入れてくださいます。そこでは神の栄光が輝き、神は全ての上に大きな「幕屋」を張り、(黙示録7・15参照)彼らとともに住まれ、全ての希望が実現されます。

御父が私たち一人ひとりのために、そうお望みになるのです。ですから、この永遠の幸福の牧場で「小羊は、彼らのそして私たちの牧者となり」「命の水の泉に彼らを導かれます」(黙示録7・17参照)

5 世界中の至る所で、神の言葉(黙示録7・17参照)を聞き、集まる教会の共同

体は、良き牧者という聖書のイメージが示す救い主の真理を玩味します。そしてあなたの教区もまた神の言葉と自らの生命の結びつきを求めて同じようにすることでしょう。

私の司牧的訪問はこの意味において特別の目的をもってしています。私がここにいるのは、神の言葉に注意深く耳を傾け、それをたゆまず実行していこうとする人々に真理が示されることを知らせるためなのです。

贖い主は信仰を強めてくださり、清さと謙遜と信頼心を絶えずもつことと信仰を生き生きと保つことができると教えてくださいます。

公会議文書によれば、このことは知性と自由意志を受けられた被造物の場合、とりわけよくあてはまります。

2 摂理は全被造物を「力強く、たくみに動かす」つつも、神の似姿として造られた被造物には特別な配慮を示します。彼らは創造主がお与えになった自由を通じて第二バティカン公会議の言う「造られたものの自律性」を享受しています。

『現代世界憲章』36参照) こうした被造物の中には純粹に靈的な存在も含まれ、目に見えない世界を形づくっています。それについては後ほど触れることにしましょう。見える世界で神の摂理が特別な配慮を示す対象となるのは、人間です。第二バティカン公会議によれば、人間は「神がそのもの自体のために望まれた、地上で唯一一つの被造物」(前出24)なのです。従って、「人間が自己の真の姿を発見できるのは、真に自己を与える時のみ」(前出24参照)です。

不変の教え

神の愛と知恵

3 人間が造られたことで目に見えない世界が完成したのだという事実は、私たちの前に神の摂理の秘義についての全く新しい展望を示しています。第一バティカン公会議の教義憲章が強調するように、知恵と知識そのものである神の目にはあらゆるものが「隠れもない(明らか)」ある意味では赤裸々である——理性を備えた被造物、すなわち人間が、意識的かつ自由に選び、決定した行動であったとしても、被造物の自由意志に関わる領域においても、神の摂理は創造力に満ち、全てを統轄する第一原因となる力を失いません。

摂理は何物にも勝る卓越した愛の知恵です。愛を通して力強く、やさしく働きます。こうして自らの被造物を豊かに恵み、父親のような心遣いをもって養い、その自由意志を尊重しつつ導いてゆくのです。

4 神の永遠の創造の計画と人間

の自由との接点に、不可思議ではあるが感嘆すべき一つの秘義が、次第に明確な形をとって浮かびあがってきます。この秘義は、神の行動と人間自身の決断との間の密接な関係(第一に存在論的、次に心理的な関係)の内に存在します。このような意志決定の自由が理性を備えた被造物の本性に属するものであることを、私たちは知っています。また、人間が自由であるという事実が、傷つきやすく弱くても真実であることも、経験からわかっています。第一原因である神との関係については、トマス・アクィナスの意見を聞くの

がよいでしょう。ここでは万物を本来の目的に向けて導く神の教知の現れとして摂理が強調されています。

「物事をその目的に沿って合理的に整えること」(『神学大全』I, q. 22, a. 1) 神に造られたものは皆、この目的性を受けており、従って神の摂理の対象となるのです。(前出I, q. 22, a. 2 参照) 神の似姿として造られた人間にとつては、目に見える被造物世界全体が神のもとへと近づいていき、被造物の最終目的を成就させるための道を見出します。この考えは、イレ

ネウスも他の箇所ですべてしていますし(『異端論駁』4, 38, 1105-1109)、第二バティカン公会議の、世界の発展に寄与する人間の働きについての教えの中でも繰返されています。(『現代世界憲章』7 参照) この世の眞の発展——つまり進歩——のために、人間は召されています。この世に神の国を打ちたてるためには、単なる(技術)だけでなく(倫理的)性格を備えることが必要です。(『現代世界憲章』35, 43, 57, 62)

5 神の似姿として造られた人間

は、目に見える被造物の中にただ一つ、創造主が「それ自体のために望まれた」(前出24) 存在です。超越的な神の知恵と力が支配するこの世にあって、神に全てを負いつつも人間は自らの内に目的を持つ存在でもあります。個人として、人間は自分の運命を決定します(自己目的論)が、そのおかげで自己開発へと向うのです。同時に義務でもある賜で豊かに満たされて、人間は神の摂理に包まれます。シラの書は教えます。「主は土から人間をつくり、…そし

て口、舌、目、耳、考えるための心を人間に与え、知識と分別を与え、善と悪を教え、人間の心にご自分の光を与え、そのみ業の威力を示された」(シラ17・1, 6-8)

6 このように(生きていく)ため

の手だてを授けられて、人はこの世の旅路に乗り出していくのだと言えましょう。人は自分自身の歴史をつづり始めるのです。神の摂理が、旅の間中ともいってくださいます。再びシラの書を読んでみましょう。「神は人間の道をたえず見られ、その御目の前には隠れるところがな

7 こうして神の摂理は人間の歴史

の中に、心と意識の歴史の中に現存なさいます。人間の中に、人間と共に摂理の行動はリズムについていき、人間の本性の発展の法則に順応するという意味で(歴史的)な次元を得ます。ただし、自立する存在としての神の超越性にはいささかの變化もなく、摂理とは個人と社会の、つまり人類の歴史の中に神が永遠に現存することです。諸民族の歴史、全人類の歴史は、神の(御目)の下に、全能の神の下で展開します。創られ

たもの全ては摂理によって「世話され」治められ「ています」が、理性を有する自由な存在(被造物)の場合、父親のような配慮にみちた神の権威は、その自由を尊重します。自由とは神の存在そのもの、神の自由そのものの似姿であるからです。

8 被造物の自由を尊重する態度

はまことに本質的なもので、摂理の神は人間が罪を犯すこと(天使の罪も)さえもお許しになったほどです。理性を備えた被造物は全てのもので、神は抜き出たはいても常に限られたものであり、不完全なものです。自らの自由を悪用して創造主である神に反抗することができるとは、これは人間の心にとつて苦悶のもととなる事柄です。シラの書は非常に深みのある言葉でそのことを写しています。

9 「自分の過ちに気づくものが

あるうか」と詩篇は尋ねます。(詩篇18(9)・13 参照) しかし罪によって人間が神を拒んだという前代未聞の事実についても、摂理を考へることに光を得て、私たちが同じ罪を避けるための役に立ちます。人間が理性のある自由な存在として創られたこの世では、そもそも始めから「罪を犯すことが可能であったばかりでなく、実際に罪が犯されたのです。罪は神に対する根本的な対立です。罪とは疑う余地なく、絶対に神がお望みにならないことです。それにも拘わらず、神は自由な存在・人間を創ることに、罪をお許しになりました。罪は被造物に与えられた自由が悪用された結果です。以上の点、つまり啓示によって知る事柄、及び罪の結果を体験できるといふ点から、次のことがわかります。神の超越的な知恵から見るならば、(創られた世界全体を展望する時) 罪を犯す可能性を徹底的に閉め出してこの世から自由を奪うよりは、自由の悪用という危険を冒しても創られた世界に自由を与えることの方がより重要であったのです。しかし、神は摂理によって、一方では罪の存在を許しながらも、他方では父の愛をこめた心遣いをもって永遠から、愛による償い、贖い、義化(聖化)の方法、救いの道を用意してくださったのです。事実、自由は愛へと秩序づけられています。自由でなければ愛することはできないのです。善と悪との戦い、罪と贖いと

の戦いにおいて、勝利を得るのは愛なのです。

『教皇様の声』ヨハネ・パウロ二世教皇の説教・書簡・講話などを解説なしにそのまま伝える月刊紙 ■毎月 十日発行 ■定価 一部八十円 送料実費 ■一年予約九〇〇円 送料六〇〇円 ■二十部以上の一括購入なら送料不要

郵便振替 神戸 3-72393